

演題番号：D1

骨形成不全症(OI)を疑った多発性骨折および骨変形の犬の1例

○木原 翠¹⁾，井上翔太¹⁾，加藤智彩¹⁾，船崎正治¹⁾，中森正也^{1) 2)}

¹⁾ 乙訓どうぶつ病院 ²⁾ 京都動物医療センター

1. はじめに：外傷を除いた犬の骨折の原因として、内分泌・代謝性疾患、腫瘍性疾患、骨粗鬆症などが挙げられる。特に若齢犬では、上述の後天的疾患に加え、稀に先天的疾患として骨の脆弱性を特徴とする骨形成不全症 (Osteogenesis imperfect: OI) が報告されている。今回、若齢で外傷歴を欠く複数の骨折、骨の変形を認め、その原因疾患としてOIを疑った症例に遭遇した。その概要を報告するとともに診断について検討した。

2. 材料と方法：トイプードル、未去勢雄、3歳。11ヶ月齢より身体検査で尾部挙上時に疼痛を示した。対症療法にて疼痛は軽減したが、休薬により疼痛が再発・持続した。同時に、前肢の内旋が緩徐に進行し、起立時など頻繁に疼痛を示すようになった。身体検査では重度の前肢内旋、背部湾曲を認め、歩行は可能だが前傾姿勢での歩様を示した。第204病日のX線検査では第7腰椎・第1仙椎間での椎体亜脱臼が疑われたため、第491病日にMRI検査を実施するも異常は認められなかった。第818病日のX線検査では胸椎の変形、両側前肢の上腕骨および橈尺骨の湾曲、骨増生を認め、病的骨折と変形した骨癒合が疑われたため、第870病日にCT検査を実施した。

3. 結果：CT検査では第7腰椎の剥離骨折と、橈尺骨・肋骨・椎骨など複数の箇所で大連続な皮質骨や骨増生が認められ、過去の骨折及び骨癒合による変形が示唆された。飼い主は骨病変に対し積極的治療は希望せず、消炎鎮痛剤の対症療法にて経過観察を行った。経過観察中に気管支肺炎を繰り返し、第886病日で汎血球減少症を発症した後、第949病日に斃死した。

4. 考察：人医療においてOIは、骨の脆弱性および骨格の変形を特徴とし、多くは1型コラーゲンの遺伝子変異によって引き起こされる。その診断は主に長骨の多発性骨折、骨密度の低下などの臨床徴候に加え、骨の病理検査、皮膚や骨をサンプルとした遺伝子検査により行われる。動物でのOIの報告は限られており、その診断方法は明確に確立されていない。本症例は病理検査および遺伝子検査が未実施のためOIの確定診断は得られなかったが、多発性の骨折及び脊椎の変形からOIが疑われた。今後、外傷歴を欠く若齢犬の骨折に遭遇した際には、鑑別疾患としてOIを考慮し、早期にCT検査を実施するとともに、積極的な病理検査や遺伝子検査の検討も重要である。